

書

評

Jing Huang,

*Factionalism in Chinese Communist Politics.*Cambridge: Cambridge University Press, 2000,
xix+458pp.あさぬま
浅沼かおり

I

著者 Jing Huang に中国政治への関心が萌したのは1970年代、雲南の山村での「再教育」の最中だった。だが、中国共産党政治の研究には危険が伴う。公式路線からの逸脱は許されないからだ。この関心を抑え込んだ著者は、大学で英文学を専攻し、歴史学で文学修士の学位をとった。その後、転機が訪れる。1987年にハーバード大学で Roderick MacFarquhar のクラスに参加することになったのだ。著者は2000年現在、ユタ州立大学の政治科学の準教授であり、本書によって積年の課題である中国共産党政治の本質に迫ろうとしている。本書の構成は以下の通りである。

序 論

- 第1章 ファクショナリズム、中国共産党政治の謎
- 第2章 ファクショナリズムと中国の政治システム
- 第3章 延安円卓の確立
- 第4章 延安円卓の変化
- 第5章 一線と二線に分けられた指導者間の関係の危機
- 第6章 延安円卓の崩壊とファクショナリズムの解放
- 第7章 鄧小平の支配——党性 (Party Spirit) に対するファクショナリズムの優勢——
- 第8章 結論

II

「ファクショナリズム」とは何か。著者によれば、「個人的な (personal) 結びつきに基づいて作られたインフォーマルなグループが、その母組織内部で、優位 (dominance) をめぐって競合する政治」(p.1) であり、そこでは、「政策決定において、インフォーマルで個人的な影響力が、フォーマルな然るべきプロセスより優位に立つ」(p.42)。繰り返される粛清や後継争いの悪循環などを特徴とする指導者間の関係、一貫性を欠く政策決定、これら2つの問題をファクショナリズムという視角から説明しようとするのが本書である。

中国のファクショナリズムについては、Andrew Nathan の clientalism に関する研究 [Nathan 1976], William Whitson の野戦軍システムについての研究 [Whitson 1973], Lucian Pye の中国政治文化の研究 [Pye 1964a; 1964b], Frederick Teiwes による高崗・饒漱石事件の研究 [Teiwes 1990] などがあるが、まだまだ十分ではないと著者は述べている。また、アメリカの中国共産党研究の3つのモデルから自己の視点を区別している。3つのモデルとはすなわち、Barnett (1967) に始まり Harding (1981) によって確立された「政策選択モデル」、Lieberthal and Oksenberg (1988) に代表される「構造モデル」、そして MacFarquhar (1974; 1983) が先鞭をつけた「権力闘争モデル」である。これらのモデルはいずれも、ファクショナリズムは従属変数だという仮定に立脚している。つまり、ファクショナリズムは、政策論争、制度的利害の衝突、権力闘争の「結果」、生じるものだとされてきたのである。それに対して、ファクショナリズムは独立変数だというのが著者の主張である。権力闘争がファクショナルな活動を生み出すのではなく、ファクショナリズムこそが権力を圧倒的な目的とするのだと著者は述べている (以上、序論、第1章)。

中国共産党のなかでファクショナリズムがどのように発展し支配的になったかについて、著者は次のように説明している。中国共産党システムは、(1)ハ

書

評

イアラーキー的文脈のなかで、権力が個々のリーダーに委ねられている、(2)多様な利害の表出のための合法的なチャンネルを共産党が独占している、(3)政策決定のためのフォーマルなプロセスが真に採用されたことはない、(4)軍隊がしばしば政治に介入する、という特色を持っており、その結果ファクショナルリズムがつきものになる。中国共産党の軍隊は根拠地で孤立的に発展してきたので、リーダーとフォロワーたちのあいだに個人的な結びつき、すなわち「関係」(クワンシ)が生まれた。そして、「関係」が創り出したOBネットワークを政治的ファクションに変えたものは「一党独裁体制」だという(以上、第2章)。

中国共産党第7回大会(1945年)で確立した「延安円卓」(Yan'an Round Table)では、「毛の支配権(command)は、党と軍隊の両方のシステムのmountaintopsによって支持されていた。それら2つのシステムは、中国共産党の政治システムのなかで事実上互いに独立しており、毛は両方のシステムをコントロールできる『唯一の』人間であった」(pp.9-10)。引用文中の“mountaintops”は「山頭」という中国語の英訳である。これは元来、「中国共産党の根拠地」のことだったが、「政治的ファクション」の同義語となり、「山頭主義」は中国共産党のジャーゴンではファクショナルリズムを指す、と著者は説明している。

上とやや重複するが、「延安円卓」の特徴は次の4点に整理できる。(1)共産党と軍隊の2つのシステムから成っており、毛沢東だけがその両方を完全にコントロールすることができた。(2)党と軍隊は事実上互いに独立していた。党と軍の関係では、個人的な関係が本質的な役割を果たした。(3)円卓のメンバーの大部分は自分の「山頭」を持っていた。(4)サブリーダーたちのあいだには、コミュニケーションや調整のための制度(institutional arrangement)が著しく不足していた。そして、毛沢東の絶対的権威を保証したものは、第1に「毛沢東思想」が党の指導原則として受け入れられたこと、第2に党と軍隊をコントロールできるのが毛沢東1人であり、それぞれの「山頭」に対する排他的なアクセスを維持して

いたために、他の指導者たちを操作することができたことである(以上、第3章)。

劉少奇と高崗の二大「山頭」の衝突ともいえる高崗・饒漱石事件を経て、1950年代半ばに「延安円卓」は重大な変容を遂げた。毛沢東がすべての問題の処理にあたり、その負担が過大になるのを避けるために、いわゆる「一線と二線を分ける」が実行されたのである。これは、一線では劉少奇(政治局)、周恩来(國務院)、鄧小平(書記処)らが実務にあたり、毛沢東は二線で根本的な諸問題に専念するという構想であった。著者はこの変容の非対称性に読者の注意を促している。すなわち、シビリアンな領域でこのような変革がなされた一方で、軍隊システムの構造にはほとんど変化がなかったのである。毛沢東が軍区を直接支配しており、軍隊システムの指導者間関係は制度というより個人的な忠誠に基づいていた。そして軍指導者たちの影響力を決めるのは制度的な地位というより、その「山頭」の大きさと、毛沢東との関係であった(以上、第4章)。

「一線と二線」構造は、毛沢東の期待を裏切った。この仕組みの導入は、次のような結果を招いたからである。(1)一線の指導者たちのあいだに共通の利害を創り出したため、ファクショナルな傾向が克服された。(2)党官僚たちに権力を与えた。制限を加えられた毛沢東は党官僚に対し、フラストレーションと疑いを抱くようになった。(3)毛沢東は常に「一線と二線」を侵害し、それが政策の一貫性の欠如につながった。(4)一線の指導者たちは、毛沢東のイニシアティブを、進行中の政策プロセスに統合しようとしたが、その成功は、毛沢東を自分のコントロールを維持するための新しいイニシアティブに駆り立てるだけであった。こうして悪循環が生じ、指導者間関係が不安定になり、ついには「延安円卓」の全般的危機=文化大革命となった。このような状況が、特に1956～58年、62～65年について検討されている(以上、第5章)。

「延安円卓」は崩壊する運命にあった。ファクションと切り離せないその構造は、1949年以後の政治プロセスの形式化に馴染まないものであったからだ。毛沢東には2つの選択肢しかなかった。自分の支配

書

評

力を形式的プロセスに適応させるか、それとも自分の絶対的支配力を維持するためにこのプロセスを破壊するか、である。毛沢東は結局は後者を選んだ。軍隊の支持を得た毛沢東の党官僚制への猛攻は、ファクショナリズムに対する組織的な足枷を取り払った。ファクショナルな党争が「延安円卓」を打ち壊したために、毛沢東の支配力は基盤を失う。林彪との緊張が高まるなか、毛沢東は、様々な「山頭」にアクセスを維持していた周恩来に頼った。だが、周恩来がその権威をシビリアン・システムと軍隊システムの両方に伸張させると、毛沢東は脅威を感じた。そこで毛沢東は、どちらのシステムの「山頭」にもアクセスを持つ鄧小平を呼び戻し、周恩来を牽制した（著者は、周恩来と鄧小平とのあいだに特に親密な関係を認めていない）。鄧小平の2度目の失脚は「延安円卓」の最終的な崩壊を意味しており、「山頭」への確かなアクセスを持った人物はもう誰もいなかった（以上、第6章）。

著者は、毛沢東と鄧小平の類似点を指摘する。2人ともファクショナルな党争を経て権力の座につき、党と軍隊の両方の「山頭」を排他的にコントロールすることによって支配力を持った。中国共産党第12回大会で確立した鄧小平の指導体制は、若干の相違を除けば、文革前の「延安円卓」の基本的な性格を受け継いでいた。しかし、毛沢東と違い鄧小平は、自分の指導権にイデオロギー的正当性を与えることができなかったで、その改革も不完全なものにならざるを得なかった。「4つの基本原則」を掲げ「毛沢東思想を堅持」する鄧小平は、改革が成功すればするほどイデオロギー領域で劣勢になるというジレンマに悩まされたのである（以上、第7章）。

本書は、ファクショナリズムの将来について驚くほど楽観的である。中国共産党の政治が安定して政策に整合性が見られるのは、絶対的な支配力が不在で妥協がはかられる時である。つまり、1989年の天安門事件以降のように、どのファクションも政治プロセスを支配することができないとき、「山頭」リーダーたちは妥協を模索せざるを得ない。「一党独裁の非妥協的性格」は少しずつ、しかし不可逆的に変わってきている。「山頭」たちがより広範な社会経済的

利害を代表し、政治参加の範囲を広げることが可能である。ファクショナリズムは長い目で見れば、より開かれた多元的なシステムを促進するものかもしれないと著者は述べ、「政治的多元主義」への展望とともに筆を擱く（以上、第8章）。

III

本書は読みやすい。著者は優れたストーリー・テラーである。豊富な資料に基づいて、中国共産党の半世紀の歴史を丁寧に描く一方で、本筋から逸れた部分は潔く切り捨てる。このあたりの呼吸は実際にお読みいただくよりほかに伝えようがない。だが何より、諸々の会議、決議、スローガン、事件などのもつ「政治的」意味を明快に断言してくれる心地よさが本書の魅力である。それは特に第6章の文革の叙述に顕著である。本書を読んで初めて分かった気になったことも少なくない。政治におけるイデオロギー操作の重要性を強調しながら、著者自身は決してイデオロギーに惑わされない。それは文革で夢と幻滅を味わい尽くした人のリアリズムなのかもしれない。著者は、中国共産党のファクションをイデオロギーという見地から識別するのは難しく、それは、「あるファクションが敗北した『あとで』（原文イタリック）」(p.411)、ページを正当化するための告発によって認知されると述べている。「理屈は後から」に対する著者の深い理解が窺われる。これは、分かっているけど書かない人が多いような気がするのだ。「政治」を知りすぎた中国人にとっては、あまりにも自明だからなのかもしれないが。

最後に、印象に残った点を3つ挙げておきたい。第1に、ファクション＝「山頭」についてである。「山頭」という語を『中日大辞典』で調べてみると、(1)山頂、山の頂上、(2)小さい集団、という意味がある。この両義性が本書の「山頭」に反映されているように思われる。本書にしばしば登場する「山頭」の多くは、(1)の意味で使われているのではないだろうか。つまり、「山頭」はファクション全体というよりファクションの領袖個人を指すことが多く、それらの領袖と毛沢東や鄧小平を含む他の領袖とのあい

書

評

だの闘争や取り引きが前面に出されている。その結果、どちらかといえば、親分衆の抗争史という性格が濃くなってしまった。

一方、本書には次のような一節もある。「中国では、普通の将校や幹部が、キャリアを始めた軍隊やシステムの外に異動することは稀だ。この現象は、ファクショナリズムという見方から説明することができる。将校や幹部は、何年かある軍隊やシステムで働いたあとには、ファクショナルなネットワークに組み込まれている。その軍隊やシステムから異動した将校や幹部は、新しい環境のなかでは居心地が悪いだろう。彼はそこでのファクショナルなネットワークにとってよそ者 (alien) である」(p.76)。「ファクショナリズムの研究」と聞いて、評者が期待するのは実はこちらである。「激動」の歴史は確かに刺激的だが、「日常」の研究もあってよい。本書が描いたのは主に、親分間または親分子分集合体間の関係だが、ひとつひとつの集合体「内部」の力学も面白そうだ。平均的な将校や幹部のキャリア・パスも興味深く、山頂だけでなく裾野まで含めた「山」の全貌を見てみたくなる。

第2に、著者は「囚人のジレンマ」を盛んに応用している。1950年代から60年代にかけての毛沢東と劉少奇の関係、文革期の毛沢東と林彪の関係、80年代の鄧小平と胡耀邦や趙紫陽との関係などをゲーム理論で説明するのが本書の特色のひとつである。最高指導者は後継者の力に脅威を感じ、両者は「囚人のジレンマ」に陥る。相互の信頼を欠くために、最高指導者も後継者も自己にとっての最悪の事態を避けることを選ぶ。その結果、現状維持（最高指導者は後継者を保護しつづけ、後継者は勢力拡張を停止する）という道は選択されない。後継者は勢力拡張を続け、最高指導者はそれを牽制するという選択肢に落ち着き、争いが生じる。その際、他の指導者たちに接近しやすいという有利に恵まれていたのは最高指導者の側である。毛沢東はゲームに新しいプレイヤーを引き入れることによって、鄧小平は反対派と取り引きすることによって、後継者に勝利することができた (pp.88-106)。

この種の分析のこわさは、前提条件がひとつでも

揺らげば議論全体が崩れ落ちるところにある。最高指導者と後継者にとって、採るべき道は単純に「闘争」と「屈服」の2つにひとつだったのだろうか。両者は本当に「完全情報のゲーム」(p.91)、すなわちプレイヤー双方が、その全容を熟知してゲームをしていたのだろうか。そして、2人とも「合理的」な選択をしたのだろうか。どちらか一方でも、不動の信念、「一か八か」の冒険、自暴自棄、コイン・トスで意思決定をしたら、あるいはそもそも決断を下すことができなかったら、成り立たないのがこのゲームである。

第3に、著者は、「パトロン-クライアント関係」、「関係」(クワンシ)、「ファクション」の3つを比較して次のように述べている。まず、パトロン-クライアント関係と「関係」には、次のような相違点がある。すなわち、(1)前者はオープンに存在するが、後者はアングラにならざるを得ず、メンバーはその存在を否定する傾向にある。(2)前者は本来経済的な関係だが、後者は長年の試練と艱難を経て鍛え上げられた個人的な忠誠に基づいており、交換されるのは本質的に忠誠と信頼である。(3)後者のメンバーは前者のそれとは違い本質的に「対等なパートナー」であり、そのため後者はより強制力をもち永続的である。次に、「関係」=ファクション (factional linkages) ではない。「関係」を土壤にファクションが培養されるが、ファクションの形成と維持には政治における共通の利益が必要である (pp.48-49)。ファクションを創ったり拡張したりするのに最も効果的な方法は、「関係」のネットワークを通じて幹部を昇進させることであり、任命によって、指導者と被任命者のあいだのそれまでの「関係」はファクションに変わるという (pp.74-75)。

「関係」とファクションについては、中国人の実感が気になるところだ。このような変化は、一般に自覚されているのだろうか。だとしたら、この場合のファクションは今でも「山頭」と呼ばれるのだろうか。「関係」は中国社会に普遍的に存在するようだが、上の説明は共産党の「外」の人間関係にもある程度は当てはまるものなのか、そんなことも知りたくなる。

書

評

文献リスト

- Barnett, Doak 1967. *Cadres, Bureaucracy, and Political Power in Communist China*. New York: Columbia University Press.
- Harding, Harry 1981. *Organizing China: The Problem of Bureaucracy, 1949-1976*. Stanford: Stanford University Press.
- Lieberthal, Kenneth and Michael Oksenberg 1988. *Policy Making in China: Leaders, Structures, and Processes*. Princeton: Princeton University Press.
- MacFarquhar, Roderick 1974. *The Origins of the Cultural Revolution*. Vol.1. London: Oxford University Press.
- 1983. *The Origins of the Cultural Revolution*. Vol.2. London: Oxford University Press.
- Nathan, Andrew J. 1976. *Peking Politics, 1918-1923: Factionalism and the Failure of Constitutionalism*. Berkeley: University of California Press.
- Pye, Lucian W. 1964a. *The Communes: A Microcosm of Chinese Communism*. Cambridge, Mass: Center for International Studies, Massachusetts Institute of Technology.
- 1964b. *The Dynamics of Hostility and Hate in Chinese Political Culture*. Cambridge, Mass.: Center for International Studies, Massachusetts Institute of Technology.
- Teiwes, Frederick C. 1990. *Politics at Mao's Court: Gao Gang and Party Factionalism in the Early 1950s*. Armonk, N.Y.: M.E.Sharpe.
- Whitson, William W. 1973. *The Chinese High Command: A History of Communist Military Politics, 1927-71*. New York: Praeger.

(共立女子大学国際文化学部助教授)